

保 育 幼 児 の 夢 (四)

マ マ の お ふ と ん

の 山

葛 原 し げ る

ほんとうの夢物語です。本当の、幼児の夢物語です。或る家庭の実話です。パパとママと、小学三年の姉と、二年の小さい姉と、坊やと五名の家庭、坊やは、まだ三つ。年は三つでも、姉二人を見まねして、年割合に、見聞は、広い方ですが、その、たわいもない夢物語ですから、まことに、たわいもないのですが、しかし、幼児にとつては、かなり、たわいのある事らしいのです。

或る日曜日の朝のこと、坊やは、自然に目がさめて、いつものように、隣の床を見ますと、ママは、もう起き出して、その寝床のおふとんは、ふくれ上っていても、ぬけがらでした。いつもは、ママは、自分のおふとんは、押しつけて平らにしておくのですが、日曜だけは、坊やの希望で、おふとんのお山を、高いままに残しておく約束なのです。それは、そのお山の向側に寝ている大姉さま、小お姉さまと、山越しに話をしたり、隠れん坊の真似をしたりして、ふざけて遊ぶのが、おもしろいから――。

この朝も、坊やは、目がさめたままで、おつむも上げないで、聞き耳を立てて見ましたが、姉二人は、まだ、すやすやと、よく寝ている様子なので、ママのおふとんの山越しに、何か、いたずらしてやろうと思うより早く、

「あ、僕、お庭のブランコに乗っていたんだっけ」と気がついたので、改めて見廻しましたが、ブランコどころか、たしかに、お家の中も、おふとんの中に、寝ているのです。

「変だナ。お姉さま二人と、僕と、三人でお庭のブランコに乗っていたのに――」

と、げげんな顔をして、よく考えて見ました。

「たしかに、ブランコに乗っていたんだ。お家のお庭のブランコに――たしかに：：」

と坊やは両腕を前に組んで考えこみました。それは、パパのまねです。

実は、この三人姉弟は、ブランコがほしくてたまらなくて、何度も、パパママに頼みました。もうせんも、三人相談して、並んで頼みました。

「三人、仲よく、代りばんこに乗りますから、ブランコ作ってちょうだい」

と、おつむを、並べて、下げました。

すると、「今に、ね。」「今に、ね。」と返事するのが、パパママのおきまりでしたが、なかなか作ってもらえませんでした、この前の日曜の朝も、朝ごはんの後で、せがみましたら、相かわらずの「今に、ね」でしたから、

「いつの今、作って下さるの。約束して

よ」約束してよ」

と、お姉さまが、二人で、つめよりましたら、パパが、

「今にッて、つまり、今に、だよ」

と、笑顔なので、坊やも心配になりました。

「だめだめ。いつの今なの。今日の今でなくちゃ、だめだめ」

と、つめよりました。すると、ママが、

「あのね、この間ね、大工さんが、材木は買って来て下さったけど、太い縄の、よいのが無くて、それに腰かけにする厚板のよいのが無いのよ。柱にする太い棒は、あったんだけど。」

「その棒、立てるんでしよう、二本——」

と、右手と左手の人差指を二本、並べてピンと立てて、

「今日、その棒を立てよう——。ね、僕、僕のシャベルで地面を掘っていいでしょう」

と気のはやいことです。

「だめよだめよ、坊やのシャベルじゃ、だめよ、植木屋さんの大きいシャベルでなくちゃ」

「うーん、だいじょうぶ。おもしろいよ。

地面掘るの、おもしろいよ。掘っても、

掘っても、土が出るから、おもしろいよ。

土の下から土が出てきて。おもしろいよ、

僕、土掘り大好きさ」

と、ブランコよりも、土掘りの方が、おもしろくなつたらしいので、パパも、

「そうそう。いつか、坊やが、あのシャベルで掘ったら、土の下から土ばかり出て、おもしろかったねえ」

と、いつかの事を思い出しました。それは、ママも、後から聞いていましたので、

「土の下から土が出る。

ほっても ほっても 土が出る

土ばかり出る おもしろや」

と、あの時、坊やの口から生れた童謡を、

繰り返されますので、お姉さま二人もあの時以来、聞いて覚えていて、声を揃えて、それを何度も繰り返すうちに、何だか、調子がついて、節になって、歌ってるみたい

に聞えてくるので、パパも一しよに、声を揃えて、

「土ばかり出る、おもしろや」

の後に、大声で「いし、おもしろや」といって、

「おまけだよ」

と大笑いされたことがあります。

そんなことはありましたが、ブランコは、未着手のままなのですが、坊やは、たしかに、お家のお庭のブランコに乗っていたのです。たしかに、じょうずに乗っていたのです。両手で、太い綱を、しっかり握って、腰かけに立って、うんと力を入れて、じょうずに漕いでいますと、大姉さまも、小お姉さまも、出て来て、二人並んで、坊やと向き合って、乗りました。それで、三人の両手が、三つずつ上下に並んで綱を握りました。三人の足が、六つ、左右に並んで、腰かけ板に乗りました。手と手は、くつききました。上と下に、三つずつ。足は、足と、六つ、びったり、くつききました。左と右に、六つ。そして、手にも足にも、しっかりと、力を入れていますから、三人とも落ちっこありません。

「さ、漕ぐのよ、いい。ほーら、ほーら」

「ほーら、ほーら」

「ブーランコ、ブーランコ」

三人、声を揃え、力を合わせて、漕ぎますからブーランコも、うれしそうに、よく揺れます。前へ行って、後へ戻って、前へ行って、後へ戻って――。

「や、おかしいな。僕が、前へ行くときお姉さま、後向きで、後戻りするよ」

「あたり前よ。それ――」

「あれ、お姉さまが、前へ漕いで来ると僕、後へ戻るんだねえ、おもしろいおもしろい」

「あたり前よ、それ。ほーら、ほーら」

「ブーランコ、ブーランコ」

ギョッ、ギョッ、綱の音がして、ブーランコは調子づいてきて、楽しい事です。そのうちに、お姉さま二人は、歌い出しました。ブーランコの揺れるのに、拍子を合して――。

前へ漕げば 前へ ブーランコ

後へ漕げば 後へ ブーランコ

前へ 後へ ブーランコ ブーランコ

風をきって ブーランコ、ブーランコ

前へ 漕げば 後へ ヒララ

後へ 漕げば 前へ ヒララ

前へ 後へ ヒーララ、ヒーララ

袂ヒララ、リボン ヒララ。

それをきくと、坊やは、

「うそ言ったらア。袂ヒララ、リボン、ヒララって、うそ言ったらあ。袂なんか無いじゃないか」

「着物きていると、袂ヒララよ」

「着ていないじゃないか」

「じゃ、スカート、ヒララよ。ねえ、オホ……」

「ほんと。スカートヒララ、リボン、ヒララが、いいわねえ」

「なぜ、スカートにしないの」

「これ、昔の歌よ。ママの子どもの時の童謡よ」

「お家にあるわ、このレコード。昔のレコードよ」

「なんだ、昔のか」

「これも古いけど、こんなの、あるのよ。」

ブーランコ、ブーランコ

こげよ、こげよ、

一つ、二つ、三つ、四つ

十まで漕いだら、代りましょう」

「何だ、たった十漕いだら、代るのか。つまらないノ。百まで漕いだらにするといい――」

「そんなに、たくさん漕いでいると、次の番の方に悪いわ」

「次の方、いないじゃないか」

「そりゃ、お家のブーランコですもの」

「だから、百まで漕いでも、代りません」

「まア、欲張り」と大きいお姉さま。

「坊やの意地悪」と小お姉さまにいわれて、

「何――」と、坊やが、脛で、小お姉さまの脚を、強く押したので、驚いた拍子に、小お姉さまは、スッテンドウと、落ちてしまいました。びっくりした大姉さまに続いて、坊やも、急にブーランコを止めて、降りて、かけよると、小お姉さまは、地面に、半分、横になって、腰をおさえて、

「あ、驚いた」と、半分、笑い顔。

「だいじょうぶ？ 痛くないの、どこか

「ええ、だいじょうぶ。どこも痛くないの」

坊やは、半分、泣き顔になっていましたが、これをきいて、すっかり安心して、

「ああ、おろ、ど、いた」

といったのを、耳きとく聞きわけて、大姉さまは、坊やに、つめよって、

「え、何ですって」

と聞きたりました。

「ぼくも、おろ、ど、いた」

と間違った発音に、気がつかないでいますので、声を大きくして

「お、ど、ろ、い、たんでしょう」

と聞いて聞かしても、まだ、

「うん、ぼく、おろ、ど、いた」

と平気です。これは、かねて、ババママも気がついている事で、姉二人も、機会ごとに、直してやる約束になっているのです。

立上った小お姉さまも、正しく、ゆっくり、

「もう、お、ど、ろ、かないでも、だい

じょうぶよ」

と聞いて聞かしても、坊やは

「うん、ぼく、もう、おろどかない」

と平気なので、姉二人は、お腹をかかえて、大笑いでした。それは、いいのですが、急に、それこそ、大驚きに驚くべき事が起りました。坊やが急に、真剣になって、お眼

々を二つ、見開いて、小お姉さまに尋ねました。

「あ、たいへん。さっき、ひどく、お尻を

打ったんでしょう」

「そうよ。お尻もちついたわ」

「それなのに、それ、どうしたの、それ、や、や」

と、目を円くして、小お姉さまの、おでこを見つめるのです。目を円くして見つめるのも道理、小お姉さまのおでこの、まん中がぶっくり、ぶっくり、ふくれ上ってくるのです。見るみるうちに、円く、膨れてくるのです。まるで、皮膚の下から噴き出すように、お饅頭が出てくるのです。おや、おやと、いよいよ目を円くして、見ている坊やのおでこも、同じように、まん中が、膨れ上ってきて、お饅頭が、出来ますので、姉さま二人も眼を円くして、

「あら、あら」

「まあ、まあ」

と、坊やのおでこを見守ります。坊やは、二人のお姉さまのおでこ二つを見比べ見くらべ、

「やあ、やあ」

と、お眼々、キョロキョロ。姉弟三人揃って、互に、互のおでこを、見つめ、見まわして、

「一体、どうしたの、オホホ……」

「みんなおかしいわ。オホホ……」

「おもしろいおもしろいよ。アハハ……」

……

と大きわぎ。

でも、少しも、心配げでもありません。

「ねえ、三人揃って、ババママの所へ行って来ようよ。き、すぐ、早く——」

と坊やが、姉二人の前になって、急ごうとしても、これは、また、一体全体何うしたこと、少しも歩けませんので、姉二人に、右手左手を引いてもらって、思いきって、急ぎかけたら、急に、バツタリ倒れた途端、はっとしたと思ったら、目がさめたのです。

「なあんだ、夢だったのか」

ああ、つまらない。でも、おもしろかったおもしろかった」

独り言をいって、自分のおでこを、さわってみましたが、元より、お饅頭はついていませんでした。そして、お庭のブランコの下でなくて、ちゃんと柔かいおふとんの中に、寝ていたのでした。それにしても、おもしろい夢でした。本当に、もし、お姉さま二人のおでこに、お饅頭が、生え出したら、本当に本当におもしろいのにと、考えてみて、坊やは、いよいよ、本当におもしろくなってしまつて、半分起き上つて、ママのおふとんの山越しに、二人のお姉さまの方をよく見てみますと、二人ともちゃんと、枕も外さないで、上向きに、よく寝ています。それでママのおふとんの山に両手をつけて、のぞいて見ましたが、どちらのおでこも、少しも、ふくらんでなんかいません。でも、饅頭付のおでこのお姉さま二人を想像して、しみじみみていると、急に、おかしくなつてきて、自然に、声を出して、ワハハハと笑つてしまいました。

実は、さっきから、うすうす目がさめかけていたお姉さまが、その笑声に気がついて、目をあけました。

「お姉さま、さっき、おもしろかったねえ」

「何が——」

「ブランコに一しよに乗っていたら、小お姉さまがおつこつて、お尻を打つて、おでこに、お饅頭が、出来て——」

「えっ。何のこと、それ」

「お姉さま、知らなかったの。お庭のブランコに、三人で乗ったじゃないか」

「お家のお庭のこと」

「そうサ」

「それ、夢でしょう」

「うん。でも、夢でも、おもしろかったねえ」

「いやな坊や。お姉さま、そんな夢、見ないわ」

「変だなア、僕、お姉さま達と、三人で、ブランコに乗ったんだもん、夢でも——」

「あら、坊やの夢ですよ、それ。坊やだ

けの夢ですよ。坊やだけ見たのよ」

「お姉さまと一しよに遊んだ夢でも、その夢、お姉さま、見えないの」

「そうですとも。変な事考える坊や」

この問答で、小お姉さまも、目がさめて、寝たままで、よく聞いていましたので、

「夢はねえ、自分だけ一人見るのよ。別の人には見えないのよ」と起き上りました。

「あんなに、よく見えたんだけど、お姉さま、二人とも、一しよに、おでこに、お饅頭をつけて、おもしろかったんだだけだなア」

「変な坊や——」 「ほんとにねえ」

姉二人は、弟が、変な事を考えるので、少し心配になって、互に、顔を見合わしていますと坊やは、突然、

「分つたわかった。分つたよ。僕の夢がお姉さまに、見えなかった理由が、分つたよ」

と、ニコニコしながらいうのでした。

「あのねえ、僕と、お姉さま達と、ここで寝てるけど、ママのおふとんのお山が

高いから、まん中で、邪魔になって、僕の方が、見えないでしょ。だから、僕の見てる夢だって、見えないサ。ねえ、見えないねえ。そうだよ。そうだよ。やっと分った。うん——」

と、独りで満足して、なお続けて申しました。

「本当に、おもしろかった。だから、お姉さまママのおふとんの上から、僕の方を、のぞいて見ると、おもしろい夢が見えたんだがなア。おしかったなア」

これをきいて、姉二人は、いよいよ心配になってくるので、ババママに話して考えてもらおうと、それぞれ、思いついて、また顔を見合っていますと隣の部屋から、ババがはいって来て、

「やア、お早う。ところで、坊や、おもしろい夢を見たねえ。ババも、おろ、ど、い、たよ。アハハ……」

と笑われるのですが、三人とも、ババも、ふざけて、坊やのまねをして、ことばを誤まってつかっている事なんか、少しも気がつかないのです。姉二人は坊やの頭が、

少しでも、変なものはないかと、それが、たいへん、心配になっているのですのに、ババは、

「三人の問答をね、ババは、みんなきいていたんだが、三人とも、それで、いいんだよ。ババのおでこにも、お饅頭が、生えないかねえ。ワッハッハッ……」

そこへ、ママも来て、ババからこの物語をきいて、大ニコニコ。

「おもしろかったですねえ。夢にしても三人仲よく、ブランコに乗って——」

と、おうれしそう。ババも、ニコニコしながら

「ママのおふとんの山が邪魔になって、坊やの夢が、お姉さまに見えないというのは、本当だよ。全くおもしろいよ」

と、独りで、喜んでいました。しかし、数日後、ママは、少し気にかかるので、改めてババに尋ねました。

「何だか、あまり非科学的な解釈をして、それで、いい気になっているようですけど、坊や、どこか、精神的にも、神経系統とか、変な所は無いですか」

すると、ババは、自信をもって、

「だいじょうぶ。幼児の直感力というか、神秘の感じ方は、おとなの科学とは、別なんだよ。だいじょうぶ!! 幼児の夢は大事にしてやらなくちゃね」

と、太鼓判を押すように、断言するのでした。事実、この坊や、小学校には、年弱の七歳で入学しましたが、二年生の時から体も心も、すくすく伸びて、昔の中学卒業まで、東京教育大学の附属在学中、前後十一年間、副級長をつとめ、当時、至難といわれた海軍兵学校にも進学しえて、立派な海軍士官として、華々しく活躍しました。

(昭和36、9、19日、東京西片町にて)

